

# 学びの風便り

リーディングスクール通信 16 R6.1.31

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

## 特集！学びの改革のあゆみ 筑摩野中学校・波田小学校

### 筑摩野中学校

筑摩野中学校では、「対話を基盤とした授業づくり」を全校研究テーマに掲げ、5月より「対話」生み出すための4人組グループでの授業を行っています。2学期は、特に「聴き合う学級づくり」に取り組んできました。また、麻布教育研究所の村瀬公胤先生を講師に7月と1月に授業クリニックとして授業づくり研修を行いました。今回は、1月16日に行われた授業クリニックを紹介します。

#### 知っている子どもの姿が違って見えた！

職員が2つに分かれて、2年生の国語と3年生の美術を共同参観し、放課後に授業懇談会を行いました。国語では「『兼好法師・徒然草』は人生の教科書としてアリ？ナシ？」という学習問題のもと、生徒一人ひとりが考える兼好法師の人柄や考え方をJamboardに貼り、全員で共有した後、共感できる・できない、尊敬できる・できないことを選び、アリかナシかの理由を考えました。自分の学びのタイミング、スタイルが保証される中、自分と向き合って書く姿や「どっちにした？」など対話する姿がありました。

美術では「北斎ってどんな人？」という学習問題のもと、先生が北斎の生き様を紹介し、クイズ形式で北斎について学んでいきました。先生の問いかけに対して4人組で自分の考えや思いを伝えながら、答えていく姿がありました。村瀬先生からは「対話型鑑賞」にするために、2枚の鳳凰図を示して「どちらが晩年の作品か、理由と合わせて（生徒が）説明する」といった学びの例が紹介されました。

授業懇談会では「クラスであまりしゃべらない生徒が学習カードを見返しながら話していて前向きな姿があって4人グループの効果だと思った。」「普段あまり授業に参加しない〇〇さんが小さい声ながらも先生の問いに答えていて驚いた。」など生徒の学びの姿をもとに、先生方が自分の気づきを語り合いました。

#### 教科書スタート 子どもゴールの学びへ！

村瀬先生からは、筑摩野中学校の現在までの取組を踏まえ、以下のように示唆に富んだご指導をいただきました。

「4人グループ」…グループだからといって話し合う必要はなく、相談するかどうかは子どもが決めればよい。1人で学ぶことが保障されていること、近くに学んでいる友達いる安心感が大事。

「問い(場面設定)」のあり方…問いに「!？」という魅力・学ぶ価値があり、つい考えたくなる、聴きたくなるから、結果的にグループの対話が起ころうことが理想的。「～について考えよう、調べよう」「～できるようになる」「アドバイスし合おう」という『Let's型』の問い・課題よりも、「～は何か」「どこか」「どちらか」「なぜか」「どうやるか」などの『W型/Question型』の問い・課題の方が探究型の学びになる。

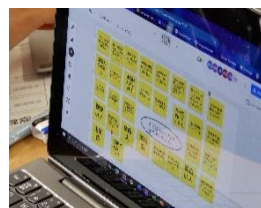
『Let's型』の問い=『答え構造』の「問い」では先生の言いたいこと=教科書がゴールになる。(例：くり下がりの計算のしかたを考えよう⇒くりさがりは～すると計算できる(=答え))。

一方、『W型』の問い=『納得構造』の「問い」は子どもの表現がゴール(教科書はスタート)になる。(例：くりさがりは～すると計算できるそうです、どうしてでしょう？⇒くり下がりとは〇〇することだから(=納得))。

『W型』の問いでは、理由や意味を説明する学び方を獲得できる。

「協働的で探究的な学習」とは、「学び手が選び、考え、表現する学習」。定義・事実は1つだが、それをどのように納得するか、意味づけるかは子どもの数だけある。教科書のまとめをゴールにすると、生徒は間違えるのが心配で話しにくくなる。教科書をスタート(踏み台)にする学び方を設定し、答えのない問い、何を話してもいい問いを提示することで生徒は話すようになっていく。

「協働的な学び」に全校で歩み始めた筑摩野中学校。村瀬先生から示唆いただいた視点を共有し、すべての教科で、「問い」に対する「子どものアウトプット」がゴールになる学びを目指していきます。



兼好法師はどんな人がJamboardで共有



美術の一場面



子どもの姿をもとに良さを語る村瀬先生

## 波田小学校 多様性を受容する仕組みづくり



「学校で教わることは初めてのことに、先生たちはどうして、1回教わっただけですぐにできるって思うの。できないとダメなの。」…こんな子どもの思いを受容したいと願い「多様性を受容する仕組みづくり」のため、「子ども理解と多様性を受容する授業づくり」にチャレンジしている波田小学校。働き方改革で生まれた時間を、「私たち自身を高める学びの時間・子ども理解を深め語り合う時間」にしようと、職員自らが研修を企画し、「読み書き障がいの困難さと支援」「算数障がいへの理解と支援」などの研修を重ねてきました。また、「多様性を受容する授業づくり」を目指し、「子どもを真ん中に据えた授業」を大切に、算数や体育の授業を中心に部会を通して、子ども理解と教材研究を重ね学び合いました。今回は、その中から教科担任制を取り入れた体育の「表現活動」について紹介します。

### 多様性を受容する授業づくり！～すべての子がいきいき取り組む表現活動を目指して～

体育部会では、「運動が苦手な子も友と関わりながら楽しむことができる授業」をテーマに、教科担任のK先生とA先生が担当する5年生を中心に研究を進めてきました。「人前で表現するのは恥ずかしい」と思いがちな思春期を迎える子どもたちに、「友と関わりながら生き生きと楽しく表現してほしい」と願い、単元名を「〇〇になりきろう！レッツムービング！」としました。また、「K先生が授業を先行実施するようにし、その様子をお互い情報共有し合い、A先生の授業に生かそう」と努めたり、「恥ずかしさを楽しさに変えられるように」と、授業最初の準備運動にダンスを取り入れたりするなどの工夫を重ね、単元を進めました。

「子どもたちがのってきてくれるのか」と不安を抱え単元をスタートしたK先生。11月末に実施した校内研究授業では、準備運動のダンスで「ナイス」「いいよ」などのK先生の声が響き、音楽にのりダンスを楽しむ子どもたち。「『ジャングル』のイメージを広げて思いついたまま動いてみよう」の「めあて」確認後、体育館中に子どもたちが考えた「お題」のカードを並べました。子どもたちはグループごとカードをめくり、「ライオン」「ターザン」など記されたお題をどのように表現しようかメンバーと考え、友とアイデアを共有しながら楽しそうに体全体で表現していききました。「これは何でしょう」と互いの表現を見合う場面も取り入れ、「正解」「ナイス」などの声が飛び交う楽しい時間となりました。

12月初旬、松本市体育同好会の研究授業も兼ね授業公開したA先生。今回の授業では「海」をテーマとし、表現の「お題カード」に「〇〇する魚たち」と情景設定を加えるよう工夫しました。準備運動を兼ねたダンスでノリノリになった子どもたちは、「メリハリをつけた『海』を表現しよう」という「めあて」確認後、「大きな魚に変身したスイミー」などカードに記されたお題を友と相談しながら楽しそうに表現していききました。お互いの表現を見合う他グループとの交流会は、「ナイス」「すごい」などのカードを示し、互いの表現のすばらしさを共有し合う時間となりました。



12月の公開授業の一コマ

二つの授業とも、参加したすべての子どもたちが、友と関わりながら自分たちの思ったイメージで体を動かし表現を楽しむ姿が見られ、「多様性を受容する授業づくり」が体現された時間となりました。

#### 【授業を終えたK先生とA先生の思い】

- 子どもから学ぶことが多かったです。こっちが先に「これは無理だろう」と決めつけていたことに気づき、「こんな表現ができるんだ。こんな動きができるんだ」と驚きの連続でした。子どもってすごいなと思いました。体育の得意な男子が「サッカーやらせてよ」というのではないかと心配したのですが、そんな声を一度も聞くことなく、運動が苦手な子も楽しそうに表現しているので、とてもうれしかったです。
- 5年生の子どもたちに「恥ずかしさ」を「楽しさ」に変えてほしいと考え、ウォーミングアップをダンスに変えたり、音楽を工夫したりして試行錯誤しながら実践しました。正直、あんなに子どもたちが楽しそうに表現してくれるとは思わなかったので、その姿に驚き、単元通してずっとワクワクしながら授業ができました。初めて表現活動の授業をしましたが、ぜひ他のクラスでもやってみたいと思いました。